

生の逆説的な関係を描いているのである。そして、シェイクスピアの『ソネット集』、中でも特に有名な第18番に、ワイルドの人生観が集約されているといえよう。

And every fair from fair sometime declines,
By chance or nature's changing course untrimm'd;
But thy eternal summer shall not fade,
Nor lose possession of that fair thou owest;
Nor shall Death brag thou wander'st in his shade,
When in eternal lines to time thou grow'st:
So long as men can breathe, or eyes can see,
So long lives this, and this gives life to thee.



研究発表要旨 色彩と女性の服装をめぐる

——『何でもない女』を中心として——

新 谷 好

(追手門学院大学講師)

唯美主義作家ワイルドにとって、色彩の象徴性は創作上の重要な要因である。その点を暗示する Michael Field の逸話に拠れば、「王女の誕生日」の着想を「黒と銀」の色彩で得たワイルドは、殊更に「ピンク」と「ブルー」の色彩を称賛している。「ブルー」の色彩に関しては、「ブルーについてのキーツのソネット」(1886)の中で、彼は、単なる色彩から「驚嘆すべきモチーフ」を引き出したキーツの「繊細な色彩のハーモニー感覚」を賛美している。他方、「ピンク」の色彩は、彼の風習喜劇の中に散見される。

まず、『レディ・ウィンダムミアの扇』では、アーリン夫人の台詞、「ピンクのシェードがある時は29歳、ない時には30歳ですの」がある。Alan Bird の *The Plays of Oscar Wilde* に拠れば、ワイルドはこの劇を「ピンクのランプシェードのあるモダンな上流階級の客間の劇の一つ」と呼んでいる。そう言えば、『理想の夫』の第三幕でも「ピンク」のシェードが意図されている。というのも、この場面の「卜書」は、本来、「シェードがつけられると『客間ではローズピンクの明るさ』になる」となっているからである。この劇では、さらに、「ピンク」の手紙も意味深長に使われている。また、『真面目が肝心』でも、「ピンク」のバラが意味ありげに使われている。このような「ピンク」の色彩の着

想を、恐らくワイルドは、ホイッスラーの「肌色とピンクのハーモニー」(1882)という絵画作品から得たのであろう。というのも、1882年にホイッスラーに宛て、彼は、「例のかわいいピンクのレディ……」(傍点は筆者)と書き送っているからである。

さて、この当時は、女性がファッションに熱を上げた時代である。女性の服装に関して、彼が相当な見識を有していたことは、「女性のドレス」(1884)、「ドレス改革に関するより急進的な考え方」(1884)などで十分知られるところであるが、ここで着目したいのは、女性の品格と服装との相関関係である。『理想の夫』でのメイベル・チルトンの台詞、「パールを身に付けますと、大して美しくないですし、とても善良で、とても知的にしか見えませんものね」は、そのことを示唆するものである。Victorian Studies (1989年 Winter号)で Mariana Valverde が指摘するように、「ヴィクトリア朝ファッションでの鍵となる記号論的識別は『慎ましいドレス』と『華美』との間の識別である」と言える。ワイルドの風習喜劇でも、「ビューリタニズム」との関連で、女性の品格と服装との相関関係が巧みに利用されている。例えば、「不道徳なフランス小説の豪華版のように見える」アーリン夫人、「ずいぶんルージュは付けていたけど、十分なだけの服は身に付けていなかった」チーフリー夫人などは、「華美」な「過去のある女」であるのに対し、「善良な」レディ・ウィングミア、「すべて善良なるものの白の象徴」のレディ・チルトンなどは、社会的地位に相応しい「慎ましい」ドレスを着ていることになる。

ここで、台本で「ピンク」の色彩が一度も使用されていない『何でもない女』の上演を取り上げ、色彩と女性の服装の観点から検討してみることにしたい。この劇の上演の際のコスチュームに関しては、The Sketch に掲載の記事「ハイマーケット劇場でのドレス」に詳しいが、まず、レイチェルはどうだろうか。彼女は、台本で「黒いベルベットのご婦人」と語られるように、《二回とも黒の、厳粛に見える二着のガウン》を着て登場するが、彼女は、「ジョコンダ」的な女性である。そのことは、イリングワースとの別れ際に、彼女が神秘的な表情を口元に浮かべることからも明白であろう。それでは、ヘスターの場合はどうだろうか。台本で「白いモスリンを着た」と語られる「ビューリタン」のヘスターに関しては、削除されたアロンビーの台詞、「彼女、とても質素な服装をしていらっやいますもの」を想起すべきである。最終的には、この質素な身繕いのヘスターも、《ピンクっぽい黄色の》ドレスを着る「世紀末の人間」に変貌している。では、「白」と「黒」の二人を「野暮ったい女」と皮肉るアロンビー夫人はどうだろうか。彼女の服装に関しては台本に言及がないが、彼女は、実際は、《白》と《黒》を縋い交ぜにした《ピンク》の女性として舞台上で登場しているのである。

最後に、Nina Auerbach が *Woman and the Demon* でヴィクトリア朝社会と「女性」との相関関係を見事に指摘しているように、「天使」の系列の女性ヘスターも「墮落した女」の系列のレイチェルも、本来、「因襲道徳を嘲る力を超自然的に授けられた生き

物」である。特に、ヒロインのレイチェルは、「黒」に身を包んだあの神秘的な「ジョコンダ」、つまり、紛れもなく「肉体」をもつアンダーワールドの系列の女性である。しかし、彼女は、Alison Lurie の *The Language of Clothes* から借用すれば、「宗教的或いは世俗の禁欲主義、官能的生活の象徴的拒否である」「黒」の衣服に、その「ピンク」の肉体を封じ込めようとしているのである。

研究発表要旨 『ドリアン・グレイ』の音と沈黙

今村 潔

(千葉経済短期大学講師)

オスカー・ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』は画家バジルのアトリエでの場面で始まるが、ここでは蜂の羽音によって、静けさが強調されている。この作品では、重要と思われる場面で、このようなかすかな音を利用して静けさを強調する方法が使われている。

例えば、最初にヘンリー卿の話聞いた後、ドリアンの内面に変化が現れ始めるところでも、バジルの筆の音と、彼が絵を見るために後ろにさがる音だけが聞こえ、静けさが強調されている。そしてヘンリー卿も、こういう時の沈黙の大切さをよく知っているので、意識的に黙っていると書かれている。

また、肖像画に最初の変化が認められる直前、ドリアンは静まり返った広場を眺めてから自分の家に入る。そしてその翌日、シビルの死の知らせを受ける前に、ドリアンの部屋には蠅が飛んでいることが描かれている。そして知らせを聞いた後では、夕闇の迫る部屋には、沈黙があるだけである。

画家バジルがパリに行く前に、ドリアンの家に立ち寄り、肖像画を見に行くが、二人は足音を忍ばせて階段を昇る。そしてバジルが殺されたとき、聞こえるのは、窒息したような叫び声と、床に血のしたたる音だけである。部屋から出て、階段を降りるとき、階段がきしみ、人の叫び声のような音を立てるが、ドリアンが立ち止まると何の音も聞こえなくなる。

そして、バジルの死体の処理をアラン・キャンベルに頼む場面でも、蠅の飛ぶ音と時計が時を刻む音だけが聞こえてくる。キャンベルはドリアンに関わりたくないで、ドリアンの頼みを拒絶するが、ドリアンの脅迫によって承知せざるを得ない。沈黙はこの静かな重苦しい状況を効果的に描き出している。

ジェームズ・ヴェインが死ぬ場面は、兎狩の最中なので、にぎやかであり、今までの場